



おかやま環境ネットワーク NEWS

NO.102
2025.3

【発行】公益財団法人
おかやま環境ネットワーク

おかやまの豊かな自然とくらしを考える部会 連続学習会「今、岡山に自然史博物館を～自然の再生を考える～」開催報告

おかやまの豊かな自然とくらしを考える部会（略：自然とくらし部会）では、2024年度に、岡山県内外の自然史博物館の視察とともに、自然史博物館の意義を市民と共に学ぶ場として3回の連続学習会を開催しました。各講師には、自然史に関連した情報提供とともに、講師が考える自然史博物館の意義について話題提供をお願いし、各回最後の総合討論では参加者を交えた意見交流を行ないました。

【開催趣旨】

今、岡山県でも生物多様性が急速に失われています。ふるさと岡山の生き物や自然は県民共通の財産であり、これまで採取された標本や地域の自然情報を残し、未来に引き継ぐことが急務となっています。

2022年、弊財団は「おかやまの豊かな自然とくらしを考える部会（略：自然とくらし部会）」を設置しました。今回、専門家の皆さんと市民が同じ目線で、ふるさとの自然を未来のまちづくりに生かしていく拠点ともなる自然史博物館の意義を学び、設置の必要性について考える機会として、3回連続の学習会を開催します。岡山の豊かな自然とくらしを残していきたいと考える多くの皆様の参加をお待ちしています。

◆ 日時：2024年11月24日(日)
13時～16時

◆ サブタイトル：岡山の動物や昆虫たち
から必要性を考える

◆ 参加人数：19名

◆ 講師1：小林秀司様（岡山理科大学教授）

演題「動物系資料に見る岡山の情報累積度
～我々は一体この状況をどう理解し、
何をすれば良いのか？～」

◇ 講演概要

岡山の自然の特徴として、手つかずの自然はほとんど残っていないのに、人が紡いできた長い歴史とともに様々な動植物が息づいていることがあげられる。だが、そうした動植物の棲息実態を地元の我々自身がどの程度理解しているかといえば甚だ心許ない。まとまった調査がなされていない分類は数知れず、かつて日本三大干潟の一つと言われた児島湾も、締切堤防ができる前にどんな生きものが棲息していたのか記録が全くと言って良いほど残っていない。

3. その自然の昨今の状況は

私の感覚では、急激に劣化しつつあるのではないかと

その根拠； へんてこりんな生きものが身近からすごい勢いでいなくなりつつあるのではないかと

例1； ハリサシガメ； アリの死骸とゴミの山からなぜか足が生えていて動いたりする。



2020年までは岡山理科大のキャンパス内で時折見かけたが、この数年は見えていない。

例2； ヒミズ； モグラとジネズミを足して2で割ったような中途半端な存在。



2010年頃までは毎年、岡山理科大のキャンパス内で見かけたが、この数年は見えていない。

◇ 講師の自然史博物館への言及

近年、自然生態系の劣化が著しいと言われることがあるが、実際には過去の記録や標本がほとんど残っていないため、現在と比較ができず、結果として客観的な評価はできずにいる。こうした時、欧米諸国の文化的背景を持つ社会であるならば、たいいていは自然史博物館が機能して、時代とともに移ろいゆく生物相の比較の材料を提供し、国内でも多くの県立自然史博物館はその役割を担っている。我が岡山県では倉敷に自然史博物館はあるものの、運営規模からすると生物の広

汎な分類群をカバーし切れているとは言い難い。

しかしながら、現在、急速に変化しつつある社会のあり方や、急激に衰退しつつある日本の地域社会を考えると、莫大な経費が必要になると考えられる総合型の自然史博物館の設立はかなり厳しいといわざるを得ないのではないだろうか。

では、我々は何をすれば良いのだろうか？一般論として、まともな自然史博物館を設立、運営するのは大変な経費がかかる。

本来なら、どうしても場（箱物）が必要。常識的な博物館を立ち上げる時の流れは？①場があると、②人が集まってきて、③ものが動くようになり、④資金が回り始める。こうした常識的なアプローチは果たして通用するのだろうか？知恵の出どころである。

◆講師2：中村 圭司氏（岡山理科大学教授）

演題「岡山の動物や昆虫たちから必要性を考える」

◇講演概要

岡山には豊かな自然が残されている場所が多く存在し、特に水域の生物相の豊富さは、他県から訪れた人が驚くほどである。一方、里山環境の維持が困難になっている地域も多く、また、温暖化など環境の変化による生物への影響も無視できない。

岡山に生息するユニークな昆虫や、生息環境の変化によって昆虫相が変化している例や生活史が変化している例を紹介することで、岡山の自然を考えるきっかけの一つとしたい。オオシロカゲロウ、ミヤマアカネ、ヒメボタル、カメムシ類、セミ類などについて大学で実施した生態、生活史の研究例から、個性的な昆虫がどのような生態を持っているのかを説明する。それにより、岡山における自然史博物館の必要性を議論する機会を提供したい。



ツクツクボウシ

8月中～下旬にかけて成虫が現れるとされていたが、最近、岡山市内で7月から鳴き声を聞くことができる。



いつ頃から成虫が現れるのか？
なぜ早い時期に鳴くようになったのか？

を調べた

◇講師の自然史博物館への言及

岡山には豊かな昆虫相が存在しているが、豊かな自然環境の維持が困難になっている地域も多く、温暖化など環境の変化による生物への影響も無視できない。現状を未来に残す拠点となる場所ができることが望まれる。

セミのように都市化による影響を強く受けていることにより、生活史が変化している昆虫が他にもいるかもしれない。

◆総合討論での自然史博物館に関する意見交換

- 1) 施設と専門知識と資金が必要（例：スミソニアン）。
- 2) 日本にはタイプ標本が極めて少ない。
- 3) 国外の博物館は入場料無料。市民の意識が高い（寄付）。会員数が非常に多い。
- 4) いいコンテンツがあるのに（市民に）伝わっていない。
- 5) なぜ倉敷でなぜ岡山市にはないのか。倉敷市立の背景には、重井氏の功績が大きい。
- 6) 温暖化の進行を確認するためにも、データや標本の保存・管理が必要。
- 7) 岡山市民の中で必要だという声が出てこない。
- 8) 海外では貴族の科学を市民の科学に取り戻す動きがあった。休みに学ぶ場所として自然史系博物館がある。市民科学を醸成する場所としての機能も。
- 9) 香川県にはRDB作成研究者が主体となったNPO団体による「みんなでつくる自然史博物館かがわ」がある。
- 10) 岡山は地質が多様。地質と昆虫の結びつきは研究価値がある。
- 11) 東日本大震災では、沿岸部の小さな博物館が震災影響で損壊。吉備高原は岩盤が安定し大震災等のリスクが低い。
- 12) 植物相だけでなく昆虫相や動物相がどのように変わってきているかを把握することが必要。
- 13) 既成事実化しているものでもデータ解析すると真相は違うことがあることを学ぶ機会も必要。
- 14) 温暖化への適応した生活も必要だが生物にどう影響があるのかも情報収集していくことが必要。

- ◆ 日時：2024年12月14日(土)
13時～16時
- ◆ サブタイトル：岡山の植物と淡水魚
から必要性を考える
- ◆ 参加人数：29名

◆講師1：沖 陽子氏（岡山県立大学学長）
演題「岡山の植物から必要性を考える」

◇講演概要

岡山県での植物研究の歴史を、明治時代～大正時代、1930年、戦後で整理し、その中での植物研究のレジェンドとして佐藤清明氏（里庄の偉人：博物学者）と西原禮之助氏（牧野富太郎氏の縁者）を紹介。また岡山県植物研究会の発足（1981年）から自然解散（1994年）までを紹介し、現状を、年月が経過しレジェンドらとの交流が消え、地域での植物調査の報告書や論文等は所在不明となっている。ガリ版刷りで刊行し同好の方々に配布されたものが多く、個人情報尊重により調査は困難となっている。岡山県全体の植物研究史を調査が求められる。

環境省湖沼水質保全特別措置法に基づく指定湖沼に指定（1985年）され水質保全対策管理が行われている児島湖の植生変化について、汚濁負荷は下水道整備等により改善は見られるものの、抽水植物・浮葉植物・浮漂植物・沈水植物がバランスよく繁茂した本来の淡水湖沼の姿は、外来種の進入や底沼浚渫、地球温暖化などの影響を受けながら、ホテイアオイやササバモを始めとした個別種ごとに大きく変遷しており、今後の児島湖の好ましい水域環境に改善維持するための植生管理を早急に検討する必要がある。

7 児島湖にはホテイアオイがよく似合う！

- 1974年(S49年):日本雑草学会講演会にて岡山県農試から講演発表
「児島湖にホテイアオイ大繁殖」
- ホテイアオイ現存量 新鮮重 45kg/m²
(乾物重 2kg/m²)
- JPF児島湖研究グループ植生調査(1970年頃)
 - 抽水植物:ヨシ・マコモ・ヒメガマ・フタイ・カンガレイ・ハス・ミスオオバコ・オオアサモ・コナギ・ミスアオイ
 - 浮葉植物:トチカガミ・ヒシ・デンジソウ
 - 浮漂植物:ウキクサ・アカウキクサ・サンショウモ・ホテイアオイ
 - 沈水植物:カワツルモ・イトヤナギモ・ササバモ・エビモ・イバラモ・クロモ・セキショウモ・マツモ・ハゴロモ

◇講師の自然史博物館への言及
なぜ、今、ミュージアムが必要か

- 気候変動・温暖化
 - ・岡山市は過去100年間で最高・平均気温が1.3℃上昇
- 普通に存在する種の確認：希少種のみではない
 - ・コスモポリタン種も存続が危ない

- ・市民科学（Citizen Science）醸成
- 過去と現在を記し、未来を予測することによる次世代への継承
- ・地球環境規模の環境変化を地域で把握して、地域の植生変化を記す重要性（地質時代の観点からも重要）

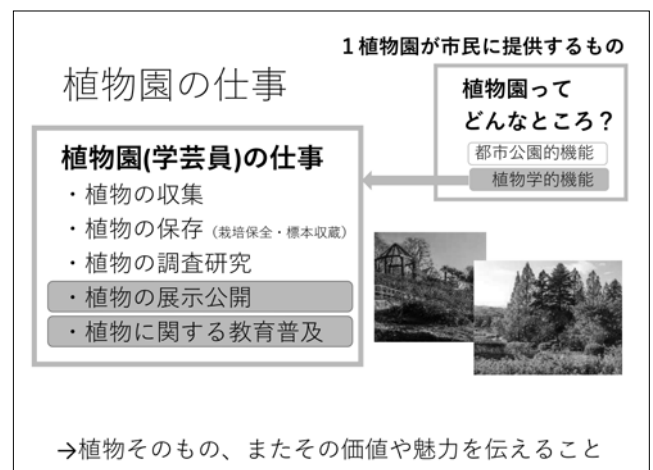
◆講師2：岡田 智子様
演題「植物園が市民に提供するもの・外来植物について・標本とデータについて」

◇講演概要

植物園は、都市公園的機能と植物学的機能を持つ施設であり、植物園(学芸員)の仕事(植物学的機能から)、植物の収集・植物の保存・植物の調査研究・植物の展示・植物についての教育普及など、植物のそのもの、またその価値や魅力を伝えること。

外来植物とは、もともとその地域になく、人間の活動などによって他の地域から入ってきた生物種。どこから入ってきたのか(国内、国外)、人とのかわりかどうか(栽培種、野生種)、いつ入ってきたのか(史前帰化・有史～江戸・江戸末以降)で分類できる。岡山県の外来植物(維管束植物)は約650種で県の野生植物の約20%を占める。生態系・人の生命や身体・農林水産業への被害を及ぼす外来種に対しては、生態系被害防止外来種リストが設定され特定外来種として飼育・栽培・運搬・輸入・野外放出・譲渡などが規制される。県内では特定外来生物(植物)19種類のうち10種類が確認されている。

※講演後新たに水草1種類(ナガエツルノゲイトウ)が確認され11種類となった。



◇講師の自然史博物館への言及

- 標本の重要性和データの利用、たずさわる人の大切さ
- ◎ 標本の重要性
 - ・種や種類のタイプ標本として同定のよりどころと

なる

- ・各種研究の証拠となる
- ・文字や絵、写真の情報では分からないほんものの情報を得ることができる

⇒場所や時代をこえて多くの人により集められた標本に計り知れない価値がある

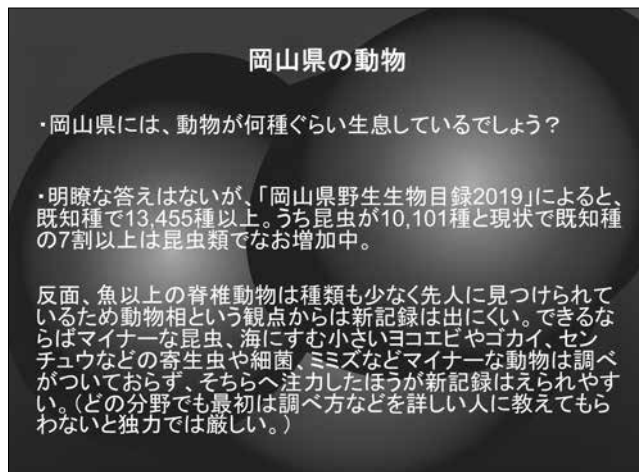
◆講師3：江木 寿男氏（岡山淡水魚研究会）

演題「岡山県で水生動物調査例および自然史博物館への期待と課題」

◇講演概要

岡山県の河川や用水路の801箇所です主にタモ網、投網などを使用して魚類の調査（2003年8月～2024年10月）を実施した。合計で158種・亜種（種まで同定できなかったもの含む）、93,312個体を記録した。

同様に603箇所（不明1箇所含む）で淡水底生動物の調査（2006年7月から2021年9月）を実施した。合計で843種の淡水底生動物が確認され、昆虫を中心とした節足動物の種類数が多かった。



◇講師の自然史博物館への言及

自然史博物館への期待と課題：以下当方が独断と偏見に基づいて箇条書きに意見を申し上げます。

- ・博物館の仕事
- ・岡山県内の自然に関する主な施設
- ・既存自然系施設との連携
- ・博物館の経営
- ・公的な博物館を作るハードル
- ・博物館での水生生物の標本や展示について
- ・野生生物は野外で生きているから価値がある
- ・標本は価値がわからない人がもっていても意味はない
- ・魚の減少をくいとめて増やすにはどうしたらよいか
- ・販売業者による捕獲の禁止を法的に整備する必要性

・博物館と岡山淡水魚研究会

◆総合討論での自然史博物館に関する意見交換

- 1) 岡山の風土、地形などのユニークさ特色を取り上げてはどうか。
- 2) 温暖化が進んでいるので希少種だけでなく普通種の変化を押さえておくことが必要。
- 3) 外来生物、外来植物が広まっている実態も把握することが必要。
- 4) 農薬などの使用による生物相への影響についても情報収集することが必要。
- 5) 学校外で学ぶ施設として政令指定都市である岡山市にも設置したい。
- 6) 市民も標本づくりは可能。顕微鏡を市民が自由に使用できる場所があれば。既存施設（例：公民館）に+αとして配置する方策もあるのでは。
- 7) 自然に興味を持つ子どもを育てることが必要。
- 8) 各地でのいきもの観察と自然史博物館がネットワークを作ることが必要。
- 9) 水の流れを知るために土地開発の歴史を調べようとしても古い地図が残っていない。
- 10) 施設を新設するのであれば、有機物で作って欲しい。水道水ではなく井戸水で。（標本を残すのは自然に逆らっているという点への理解は必要）
- 11) 自然を感じ・自然を知ってもらうための施設にしよう。

◆ 日時：2025年01月26日(日)

13時～16時

◆ サブタイトル：生物から学ぶ科学と
自然史博物館構想

◆ 参加人数：28名

◆ 講師1：齊藤 達昭氏（岡山理科大学教授）

演題「フィールド研究から見えてくる自然
史博物館の必要性」

◇ 講演概要

旭川に生息する生物を材料にいろいろなフィールドワーク研究を行っている。旭川かいぼり調査は、竹枝小学校前の分流部の川の水を堰止め、川を干上からせた状態にし、そこに生息する生物相（魚類と水生昆虫）や河床の構造を調査するもので、毎年11月上旬に市民参加型のイベントとして岡山理科大学に学生を含めて400-500人規模で実施している。私の分担は、調査時に捕獲した捕獲魚種数の報告と、アカザとカジカを標識採捕法による推定個体数算定（カジカの推定個体数は2014年～）すること。捕獲魚種数は20-31種の間で変動しているが、1地点あたりの調査では旭川でも比較的高い魚種数を示している。

アカザは、かいぼりで沈み石から浮き石にすると捕獲数が増えることが分かった。カジカは、2011年の台風出水前はいなかったが翌年調査では定着が確認できた。アカザとカジカは、浮き石の下に隠れ、水生昆虫を餌にしていることから生息場や餌では競争関係にあるので、2014年度から両種の推定個体数を継続して調べることにした。2021年度に推定個体数は、8月の台風による出水が大きく影響したのか大きく激減した。その後アカザはほぼ元のレベルまで回復したが、カジカはまだ回復途上にある。

岡山県における貴重種の特徴

1. 里地・里川・里山・里海に生息している種が多い
(ヒトに関わり続けたいと守れない生態系である)

2. 干潟・ため池・二次林(落葉広葉樹)・松林・草原・湿地

干潟→埋め立てや防波堤の強化(地下水の切断)
(ヒトが入り込む機会が少ないので、気づかないうちに失う)
二次林・松林→照葉樹林へ遷移する
草原→森林に遷移する
湿地→陸地に遷移するヒトの管理がなくなると、遷移が進行し、生態系が変わってしまう
今後は、地球温暖化の影響を最も受けやすい場所である

◇ 講師の自然史博物館への言及

自然史博物館の役割は、3つの機能がある。1) 資料の収集と保管、2) 調査研究、3) 科学教育・防災教

育である。いままでの研究でも、過去の生物標本等が収集し、保管されていれば、助かるのに痛感したことがある。

岡山の貴重種（絶滅危惧のランクが高い種）は、2009～2020年で235種増えた。分類による内訳をみると、1番目植物門・2番目軟体動物門(貝類)・3番目昆虫類・4番目鳥類・5番目魚類の順である。これらの貴重種に含まれる生態系を見ると、ヒトの関与が必須な生態系に属している種が多い。すなわち、干潟・ため池・二次林・松林・草原・湿地などである。ヒトが管理を放棄するとただちに生態系の遷移が起こり、また地球温暖化の影響を最も受けやすいエリアでもある。

地球温暖化を受けやすい生態系を守るためには、多くの一般市民が関心をもってもらう必要がある。自然と関わりがなくても過ごせる社会の中で、ボランティア活動に頼る普及啓発ではなく、常設の場での啓発活動や一般市民が容易に自由に深く学べる地域の空間が必要だと思う。

特に、旭川は我々の水源であり、大出水期になれば、大きな被害をもたらす河川である。特に、旭川は、常に関心をもってもらいたい対象である。

◆ 講師2：藤崎 憲治氏（京都大学名誉教授）

演題「バイオミメティクスの発展における
自然史博物館の必要性」

◇ 講演概要

バイオミメティクスとは、「バイオ(生物)＋ミメティクス(真似る)」ことで、バイオミミクリーと同義である。生物の持っている形は機能から学び、環境と人間にやさしい技術をつくること。古代ギリシャのアルキメデスは、記録に残る最初のバイオミミクリーの研究者の一人で、巻貝のらせん構造にヒントを得てスクリュウポンプを発明している。

産業革命以降の「人間の技術体系」は地下資源をエネルギーとし森林などの多くの生物資源を浪費し自然環境を破壊してきた。バイオミメティクスなどの「生物の技術体系」はこれまでの技術の反省の下、環境にやさしく持続的な人類の発展を意図するもの。

バイオミミクリーは、第一段階：自然の形態の模倣→第二段階：自然のプロセスの模倣→第三段階：自然のシステム(生態系)の模倣と整理されている(Benyus,1997)。森里海連環学で捉える森林生態系の総合的環境保全が川の中下流の食料生産環境と海域漁業環境の保全になるという生態系のつながりを学ぶことは、究極のバイオミメティクスである。

※講演では、とりわけ地球上の生物で圧倒的な種多様性を誇る昆虫を対象とした昆虫ミメティクスが紹介され、この新規学問分野がなぜ自然と人類の

持続可能性を促進する新たな対策の案出に貢献するののかについて考察が行われた。

ダウンサイジング技術への昆虫の活用

- ・ 大型化ではなく小型化、すなわちダウンサイジング技術こそがエネルギーを最小にする持続可能な社会を実現する。
- ・ 日本人は世界の中でも一番、小さきものを愛する民族であり、古くは扇子、小田原提灯、幕の内弁当、盆栽、新しくはウォークマン、電卓、折り畳み傘など、日本発のすばらしいダウンサイジング技術を発明してきた。
- ・ 一方、昆虫は小型化することで進化的に成功した節足動物である。
- ・ 小さきものを志向する日本文明は、さらに昆虫のように小さくて高精度な生物をモデルとした技術を展開していくことで、世界の文明のモデルとなる可能性がある。

◇講師の自然史博物館への言及

自然史博物館における生物標本が担う役割

1. 分類学の証拠の蓄積
2. 環境変化の証拠としての生物標本
3. バイオミメティクスへの貢献

自然史博物館と応用研究

日本学術会議は、「国立自然史博物館設立の必要性」という提言（2015年）において、自然史博物館の応用研究について、次のように記している。

「“ビッグデータ自然史科学”はいわば科学インフラであり、その成果は様々な応用研究に供され、あるいは新しい応用研究を派生させ、大きな波及効果を生み出す。たとえば、新自然資源や新食料生産にもとづく国土利用計画の革新、バイオミメティクスにもとづく省エネルギー政策イノベーションなど、自然に対するスタンスを一変させ、自然と人類の持続可能性を確保する新しい対策の案出に貢献する。」

岡山県における新たな自然史博物館の創設は急務！

- ・ 温暖化など地球環境が大きく変動し、環境にやさしい新たな省エネ技術が強く望まれる中、生物標本やその関連情報を保存して活用する施設、すなわち自然史博物館の新たな創設や充実がますます必要となっている。
- ・ 岡山県では、公的なものとして「倉敷市立自然史博物館」、私設として「つやま自然の不思議館」や「倉敷昆虫館」があるが、県庁所在地である岡山市には市立の自然史博物館もなければ、県立の自然史博物館もない。岡山市における公的な自然史博物館の創設が強く望まれる。

◆総合討論での自然史博物館に関する意見交換

- 1) 旭川かいぼり調査は子どもたちの疑問から始まり、継続することで行政も支援している。
- 2) 一過性でしかないので常設で子ども達がいつでも学べる施設は必要。
- 3) 市民科学の視点を取り入れること。
- 4) バイオミメティクスへの市民のアクセス権。市民の知識を増やすこととの関係性。コモン（市民の知恵）として扱えることも必要。
- 5) 教科書では伝えられない事象がたくさんある。
- 6) ニュースも本も読まない、自然の変化に気づいていない、ワクワクするような自然の体験をしていない世代が増えている。探求するキッカケを創る施設として必要。
- 7) 大学生にも生物を深く学んでいる学生が少ない。生物学が記憶の学問ではないことを伝えることに苦勞する。
- 8) 自然を感じる感性をどうやって育むか。
- 9) 大学での教養プロセスが消滅した。リベラルアーツとして復活させようとしている。博物学的な視点が抜けている。
- 10) 退職世代が自然史博物館づくりの中心的な世代になるのではないか。
- 11) パネル展示も関心がないと素通りする、共感させることが必要。
- 12) 県東部に住む人にとっても岡山市への自然史博物館は必要。
- 13) 知的好奇心に価値を与えること。
- 14) 市南部でも生物相が変わってしまっていることを地域の人は知らない。
- 15) 県自然保護センターや池田動物園や公民館などの施設活用についても取り上げてもらいたい。
- 16) 人間にとって役に立たない生物は調査すらされていない。農業や漁業の活用されているごく一部だけの研究が進んでいる。
- 17) ジョロウグモ14年間→後楽園25年間→ジョロウグモ動画10年間をライフワークとしてきた。親子で素晴らしい虫の生態を知ってもらいたい。自然の驚異を学んでもらえる博物館を。
- 18) 庄原市立比和自然科学博物館では「知的遊園地」と位置づけられている。おもしろいことは大切だが、さらに学ぶことができる施設として存在することが必要。
- 19) 小学生の段階で自然に興味を持っている。60代以上の世代がメンターになって伝えていくことをしなければ知恵の伝承もできない。その仕組みの一つとして自然史博物館が機能すれば。

自然とくらし部会で訪問した 県内外の自然史系博物館

県内外の自然史系博物館を訪問しました。ご多忙の中、学芸員の皆様に設立経過や大切にしていること、来館者に伝えたいことをお伺いするとともに、複数の博物館では収蔵庫もご案内いただきました。

誌面の都合上、事務局で聞き取った内容を中心にご紹介致します。みなさんも是非訪問をご検討下さい。

大阪市立自然史博物館 (視察：6月22日)

- この博物館は人間をとりまく「自然」について、その成り立ちやしくみ、その変化や歴史を、展示や普及活動、研究を通して広く知っていただく施設です。
- 私たち一人一人が、自然界の構造や諸関係について、幅広い知識を持つことが大切な時代になってきました。自然の保全のためだけではなく、よりよい未来、そしてよりよい生活環境を実現するためにも、大切です。
- 博物館はコミュニケーションの場、知らなかったことの目次が全部ある、そこから深掘りしてくれればいい（興味のキッカケになってもらえれば）

つやま自然のふしぎ館 (視察：7月20日)

- 展示：2.2万点（動物はく製1,200、化石・鉱物等1,270、蝶・昆虫類220C/S、貝類1,870 C/S、人体130）。基本は常設管理。アフリカ系動物はく製は一括購入（キャンセル品）。東京のはく製業者よりワシントン条約締結前に象牙含め購入。寄贈品も。
- 個人収蔵品は来歴が明確なもののみ提供を受けている。

兵庫県立人と自然の博物館 (視察：8月7日)

- 新ビジョン：目指すべき5つの博物館像
 - 1) リアルなモノ・コト・ヒトとの触れ合いに基づく多様な学びをすべての人に提供する博物館
 - 2) 自然・環境・文化を継承する担い手の活動を支援する博物館
 - 3) 自然・環境・文化と身近な暮らしをつなぐ博物館
 - 4) 自然・環境・文化の継承に資する先導的・独創的な研究・シンクタンク活動を行う博物館
 - 5) 博物館標本・資料の持つ価値をすべての人とひらく博物館

愛媛県総合科学博物館 (視察：9月14日)

- 目的：県民に科学に関する正しい理解を深めてもう

らための学習機会を提供し、創造的風土の醸成を図るとともに、科学技術の進歩と本県産業の発展に寄与すること。

- 山と海が育てた愛媛の産業、環境を人の営みにフィットさせてきた、人が世話をすること（森林管理）で恵みを得てきた、ローカルな地域の文化・歴史の遺産を残すことが使命。実物資料を残す（二ホンカワウソは日本一）。プロ監修のレプリカ展示（⇄押し葉標本）。今の気候・自然史の歴史として後世に残す、子孫のために・今生きている人のために。

庄原市立比和自然科学博物館 (視察：12月18日)

- 目的：博物館資料を未来へ正しく伝えていく役割、現在社会における課題解決や地域活性化にも積極的に関わる役割（吾妻山など比婆山連峰の自然に関わる研究活動を通じた自然保護の大切さを伝える活動）
- 運営方針：テーマ（中国山地の自然と人とのかかわり）、ビジョン（中国山地の魅力を発信する博物館）、ミッション（広島県内唯一の自然史系博物館として「驚き・発見・感動」を与えられる知的遊園地機能の発揮）。

広島大学総合博物館 (見学：12月21日)

(HPより抜粋)

- 日本一規模の大きな大学総合博物館：キャンパス内にあるものは全て展示物、大学と地域社会の窓口・架け橋として活動。知のオアシス。
- 広島大学エコミュージアム構想
 - 1) キャンパスまると博物館：屋根のない野外博物館（＝東広島キャンパス：マツダスタジアム53個分）。本館（常設展示：化石や剥製を中心に宇宙・自然・文化などを織り交ぜて展示&インフォメーションセンター）と6つのサテライト（中央図書館・埋蔵文化財調査部門・文学部・生物生産学部・理学部・両生類研究センター）、発見の小径（自然散策道・生態実験園）の組み合わせ。学内で絶滅危惧種70種以上を確認。
 - 2) 東広島エコミュージアム展開（東広島市全体）への展開：地域資源探し⇒5つのテーマ（①農村での暮らしと自然との関わり、②水や水辺と私たちの暮らし、③瀬戸内海の自然と海の恵み、④東広島市の再生可能エネルギー、⑤歴史・文化遺産からみる当地域の成り立ち）⇒見学会や「学び」ツアーの提案・実施⇒地域を知り学ぶことを通じて来場者だけでなく地域の人々が明るく元気になり、さらには地域の資源を守ることにつながる活動へ。

おかやまの豊かな自然と くらしを考える部会・ 連続学習会の開催報告

おかやまの豊かな自然とくらしを考える部会（略：自然とくらし部会）で11月・12月・01月に開催した連続学習会「岡山に自然史博物館を～自然の再生を考える～」の様子を掲載させていただきました。

各回の総合討論では、講師の方々の考える自然史博物館の意義と参加者の意見交流が活発に行われ、毎回終了予定時間を30分近く超過する企画となりました。

また2024年度は、部会メンバー乗り合わせで県内外の自然史系博物館を訪問しました。規模や予算等の違いはありますが、博物館としての基本を大切にしながら、それぞれの特色の打ち出し方・来場者への情報の提供方法などに違いがあり、岡山県内での自然史博物館について検討を進める上でも非常に参考となる情報を得ることができました。

自然とくらし部会では、2025年度も引き続き自然史博物館について考える学習会や、岡山県内での自然保全に取り組まれているエリアを訪問し現地での意見交流等を計画しています。

現在、自然とくらし部会では、部会メンバーも募集しておりますので、お気軽に事務局までお問合せ下さい。

ホタル団体交流会より

人為的で急激な地球温暖化は、ホタルたちにどのような影響を与えているのでしょうか？

ホタル団体交流会では、主にゲンジボタルの、幼虫がいつ上陸して土繭を作り～いつ土繭から地上に出て飛翔を始め、いつ飛翔ピークを迎えるのか～水辺に産卵し水生生活を送る幼虫にとってどんな環境なのか等を、保全活動を行う団体や個人の方々が集まり、気温計や水温ロガーでの観測や、実地

観察を行ったデータ等を持ち寄り、意見交換を行っています。

その中で、特に7月中旬～8月中旬の水温が県北の大きな河川でも32℃を超えるような状況が確認され、これが生まれたばかりのホタルの幼虫にどのような影響を与えているのかは非常に関心を持って見守っています。

皆さんのお近くでも、市民科学の視点で、ホタルだけではなくチョウやトンボやセミやカエルを、観察場所を決めて、初めて見たのはいつか・どのくらい観察できたか等を毎年記録にとっておくと、地球温暖化の影響なのかそれともそれ以外の要因があるのかを振り返るためにも大切な情報となりそうです。

生物多様性を保全するためにも、地球温暖化を食い止めることが重要だと考えています。

ニュースへのチラシ等の 同封物に関するお知らせ

おかやま環境ネットワークで会員の皆様にニュースを発行しています。ここに、会員団体の各種イベントのチラシ等を同封することができます。

同封希望がありましたら、発行前月の第2週末までに事務局へご連絡ください。

※メールニュースは毎月第2・4水曜日を基本に発行しています。メールニュースへ掲載希望がありましたら、毎月第2・4月曜日までに原稿を事務局に送信ください。

※特に「助成団体の対象事業」に関しましては、より広くお知らせをしていきたいと考えていますので、是非ご連絡ください。

メールニュース配信 希望者募集中

おかやま環境ネットワークの情報や、会員団体のイベント情報等

を掲載しています。

配信をご希望の方は、メールにて件名：『メールニュース配信希望』とし、メールアドレス・お名前（必須）、連絡先・所属団体・会社名（任意）をメール文にご記入の上で、右記事務局アドレスまで送信ください。

現在1,300名弱のみなさんにご登録いただいています。

個人・団体・企業 会員 募集中

おかやま環境ネットワークは、皆様からの会費、寄附、ボランティア活動で支えられています。ぜひ会員となり、活動をご支援ください。

【年会費】

個人・団体：2,000円

企業等：20,000円

大学生・大学院生・高校生：無料

2025年度の会費納入に向け、振込用紙を同封しております。主旨をご理解の上、お振込みくださいますよう、お願いいたします（入れ違いでお振り込みいただいておりますらご容赦ください）。

会費は、企業・協同組合：1口2万円、団体・NPO法人・個人：1口2千円、1口以上をお願いいたします。



発行：公益財団法人おかやま 環境ネットワーク

〒700-0026

岡山市北区奉還町1-7-7(オルガ6階)

F A X : 086-256-2565

携帯電話 : 070-2355-1420

E-mail: kankyounet@okayama.coop

HP: <https://okayama.coop/kankyounet/>

Facebook: 公益財団法人おかやま環境ネットワーク